

ジョン・ウエスレーの宣教論と 米国合同メソジスト教会の実践

山 本 俊 正

要 旨

メソジスト教会は18世紀に英国で起きたメソジズム運動、その運動を開始したジョン・ウエスレーの死後、英国で創立された。メソジスト教会はその後、米国に移植され教勢を拡大し、大きなプロテスタント教派に成長した。本稿では、メソジスト教会の創始者であるジョン・ウエスレーの神学と宣教論の主要な議論を紹介する。また、20世紀の初頭に登場した世界の教会によるエキュメニカル運動の宣教論と対比しながら、現在の米国メソジスト教会の宣教の特色、実践を明らかにする。

キーワード：心が温まる経験 (the heart warming experiences)、心の宗教 (a religion of the heart)、信仰義認 (justification)、エキュメニカル運動 (ecumenical movement)、神の宣教 (ミッシォデイ) (missio dei=mission of God)

I はじめに

関西学院は1889年に創立され、今年、127年を迎えた。創立者のウォルター・ラッセル・ランバスは米国、南メソジスト監督教会から派遣された宣教師であった。派遣母体であったメソジスト教会は18世紀に英国で起きたメソジズム運動、さらにその運動を開始、牽引したジョン・ウエスレーの死後、英国で創立された。メソジスト教会という名称は、創始者のジョン・ウエスレーとチャールズ・ウエスレー兄弟につけられた「あだ名」、ニックネームに由来している。ジョンとチャールズがオックスフォード大学時代に作った「神

聖クラブ」(holy club)の活動が大変規則的で、「Method」(方法、規則)を重視した活動であった。彼等の規則的な信仰行動をひやかし、揶揄する意味で大学生たちが彼らにつけたのが「メソジスト」であった。ウエスレーの運動が本格的になると共に、その名称がそのまま教会の名称となったことはよく知られている。メソジスト教会はその後、米国に移植され教勢を拡大し、米国でも最大級の大きなプロテスタント教派に成長した。本稿では、メソジスト教会の創始者であるジョン・ウエスレーの神学と宣教論の主要な議論を紹介し、また、20世紀の初頭に登場した世界の教会によるエキュメニカル運動の宣教論と対比しながら、現在の米国メソジスト教会の宣教論とその実践についての関係性を明らかにしたい。

Ⅱ ウエスレーの宣教師体験と「心が温まる経験」

最初に注目したいのは、ウエスレーの宣教師体験である。18世紀の英国人ジョン・ウエスレーが32才の時、当時英国の植民地であったアメリカのジョージアへの宣教師となる。船でアメリカに向かうのだが、その航海中に、暴風雨にあい、彼は死ぬのではないかという恐怖に襲われる。ところが、同船していたモラヴィア兄弟団の人たちは、恐れるどころか、落ち着いて大きな声で讃美歌を歌っていた。その時、彼は自分の信仰が頭だけの信仰ではないかと、反省するようになる。その反省はジョージアへの伝道が失敗に終わり、更に深刻なものとなる。2年後にアメリカから英国に帰国したウエスレーは、モラヴィア兄弟団の集会に行き始める。モラヴィア兄弟団とは、チェコスロバキアの一地方に起こった敬虔主義的(パイアス)なグループであったが、ウエスレーは暴風雨に遭遇した船上での体験が忘れることができなかった。その集会に出席していたある晩、ウエスレーは「心が温まる経験」(the heart warming experiences)をする。アルダスゲート通りの集会であったので、「アルダスゲートの経験」と呼ばれたりする。また、ジョン・ウエスレーの「回心体験」と呼ばれることもある。この経験について、ウエスレー自身は、1738年5月24日の日記に次のように書いている。

「夜、私はアルダスゲート通りの集会にいやいや出かけたが、ある人がルターの『ローマ人への手紙』への序文を読んでいた。9時15分前のころだったが、キリストへの信仰を通して、心の中に神が働きたもう変化について述べていた時、私は私の心が異常に温くなるのを感じた。私はキリストにより頼み、キリストのみが救いのためであると感じた。そして、キリストが私の罪、この私の罪を、取り去ってくださったこと、私を罪と死の律法から救ってくださったという確証を与えられたのであった。」¹⁾

ウエスレー自身は後に、メソジズムのことを「心の宗教」(A Religion of the heart)と呼んでいる。この経験によってウエスレーはキリスト教が頭だけの宗教ではなく、「心の宗教」であることを強調した。また、この体験はウエスレーの「第2の回心の体験」²⁾と呼ばれたりする。「心の宗教」は、歌う宗教であり、讃美する宗教にも発展し、メソジスト教会では、讃美歌が重視される伝統の基礎にもなった。またこの特色は、日本語の讃美歌の歌詞の多くが、ジョン・ウエスレーの弟である、チャールズ・ウエスレーによって書かれたものが多く含まれていることから理解することができる。後述するが、ウエスレーは当時産業革命の下支えをし、過酷な労働条件の中で苦境にあった労働者階級に宣教活動を熱心に行った。当時の英国国教会は、労働者階級には接近せず、主に上流階級の宗教となっていたことが知られている。炭鉱労働者へのメソジストの集会は主に野外集会であったが、沢山の労働者階級の人々が集まった。それはメソジズムが、彼らの心に触れる、「心の宗教」だったからである。周知の通り、当時の英国は近代資本主義の先進国であった。それゆえに、資本主義の諸問題がいち早く、噴出した国でもあった。カール・マルクスが有名な「資本論」をロンドンで書いたのも、そのためである。しかし、その英国に共産主義革命が起こらず、むしろキリスト教社会主義と、それに基づいた労働党が盛んになったのは、メソジスト運動のせいであったという分析をする後代の歴史家もいる。いづれにしても、メソジス

1) 山口徳夫訳 (1984)、「ウエスレー日記 1」(新教出版) 243頁～244頁

2) 野呂芳男 (1975)「ウエスレーの神学と生涯」(日本基督教団出版局) 129頁

ト教会の宣教論の根幹には、「心の宗教」として、頭だけの宗教ではない、宣教の実践が強く意図されていた。

Ⅲ ウェスレー神学と宣教論

次に、ウェスレーの神学について触れておきたい。現在、ウェスレーの神学に関する本が数多く出版されている。しかし、ジョン・ウェスレーが神学者であるといったならば、ウェスレー自身はそれを、否定するのではないかと思われる。ウェスレー自身は自らが神学者であるよりは、宣教者であり、伝道者であった。しかし、ウェスレーは、非常に深い神学的な考察と経験をもっており、彼の書いた様々な日誌、説教集、などにウェスレーの神学的な確信、考察を読み取ることができる。ウェスレーは、今日私たちが意味するいわゆる「組織神学」の学問的業績は残しておらず、またそのような神学的業績を残すことに興味を持っていなかったことが推測される。ウェスレー研究の日本における第一人者であった、野呂芳男は彼の書いた「ウェスレーの神学と生涯」という本の中で、ウェスレーの神学には二つの中心点があることを指摘している。ウェスレーの神学は二つの中心点を持つ楕円形的なものであるとしている。その一つは「ウェスレーの経験主義」であり、その第二は「キリスト者の完全の教理」であるとしている³⁾。ここでこの二つの中心点について、詳細に解説することは出来ないが、「ウェスレーの経験主義」も「完全主義」も漠然とした哲学的概念ではない。ウェスレーは伝道、宣教を通じて、そして教会の会衆すなわち教会の会員の個々の生活の中に取り入れられるキリストの信仰が、個々の経験の形態において、「完全」に向かうことを解いている。すなわち、「頭だけの宗教」から「心の宗教」に回心する経験等を通して、神の恵みによる「義認」に導かれる。その後、神の恵みを継続的に確認する「聖化」の過程を進みながら「完全」を目指すことになる。ウェスレーにとって教会は、いわゆるパウロのいう「キリストの体」で

3) 野呂芳男、Ibid、478頁

あり、そのキリストの教会というものの中に、ウエスレーの神学が鮮明に表われてくる。このウエスレーの教会を起点とする神学は、ウエスレーが生涯、英国国教会、日本でいえば聖公会に属する教職であったことにも示されている。彼は死ぬ迄、英国国教会の司祭として伝道を続け、決して英国国教会から離れようとはしなかった。彼の神学を決定づけたのは、前述した1738年5月24日のアルダスゲートでの体験（第二の回心）があり、彼は初めて、そこで信仰体験、「先行する恵み」の体験、自分の力ではコントロールできない「神の恵み」のすばらしさ、「回心の恵み」を経験する。そこから、個人の信仰が行為によって獲得されるのではなく、「神の恵み」によって贈り物として与えられる「信仰義認」（Justification）の立場、そしてその「救い」が一度だけで終わるのではなく、「神の恵み」によって「聖化」（Sanctification）の過程として継続され、完全（perfection）に向かうとする信仰のあり方が、ウエスレーの神学として主張されるようになる。ウエスレーは英国国教会を前提にしてその教会内での信仰覚醒運動を目指したとも言える。ウエスレーの「救済論」または「恵みの神学」の大きな特色は宣教論的に言うと、「個人の救い」から「社会の救い」へ、そして、「世界の救い」へと拡大の方向性をもっていたことが考えられる。ウエスレーは「世界はわが教区なり」（“The world is my parish”）を提唱したことで知られている。しかしウエスレー研究者の中には、このウエスレーの用いた「世界」は「教区」という伝統的な枠が前提とされており、現在のグローバルな「世界」を意味したかどうか、疑問であることが指摘されている⁴⁾。確かに、ウエスレーが教え子であるジェームス・ハーヴェイ（James Hervey）宛てに送った書簡には、「神は私に無学な人々を教えるように命じる。人は私が他人の教区で教えることを禁じる。今、私は誰に聞くべきか。神か、それとも人か。私は世界を私の教区と見なす」と記している。ウエスレーは、当時、他の司祭が担当する「教区」で教えてはならないという規則に抗議して、「世界はわが教区な

4) 山内一郎（2003）「メソジズムの源流」（キリスト新聞社）207頁

り」と提唱したことが伺える⁵⁾。しかし、この書簡が送られた1ヶ月後、1739年4月2日に、ウエスレーは「第3の回心」と呼ばれる体験をする。この体験は、ウエスレーがロンドンの郊外にあるブリストル(Bristol)という町を訪問した時に起きた出来事であった。ブリストルという町には炭鉱があり、多くの採炭労働者達が炭鉱に入って仕事をしていた。その炭鉱夫たち約3000人が入る教会がないので、野外に於てウエスレーは説教をする経験をする。この時、ウエスレーは宣教ということに関して、大きな精神的なインパクトが彼の心の内に起きたことが知られている。ウエスレーの1739年3月31日の日記には、次のように書かれている。「夕方、私はブリストルに着いて、ホイットフィールド氏と会った。私は最初どうしてもそんな野外で説教するという事を承知することが出来なかった。私は今迄全生涯中、人間の魂を救うのは、教会堂の中で礼拝をやったのでなければ罪を犯すことと考えていたのです。」⁶⁾ 当時の英国には宗教的秘密会合法(Conventicle Law)という法律があり、野外で説教をすることを、英国国教会は禁止していた。また、当時のカトリック教会と同様に、特にカトリックに非常に近い英国国教会では、「教会の外に救いなし」が救済論の原則であったことが知られている。しかし、説教を聞いた炭鉱労働者たちは大きな影響を受け回心することになる。ウエスレーはそれまで個人の魂の救いを追い求めてきたが、教会の外における他の魂をも救わなければならぬことに、関心を持ち始めるようになる。ウエスレーは教会での個人の「魂の救い」から、炭鉱労働者が直面していた社会的な問題からの「救い」に関心を寄せることとなる。内面に向っていた信仰を外面に向って出していく信仰に変化したとも言える。換言するならばウエスレーがここで体験したことは、個人的な信仰の熱情(Passion)が隣人に対する具体的な関与に変化したことである。ウエスレーは、炭鉱労働者の苦難、貧困、生活苦などに取り組むように変えられて行き、晩年には英国の黒人奴隷制度に反対の声をあげ、政府へ抗議と廃止を求める書簡を英

5) 山内一郎 Ibid、208頁

6) 山内一郎 Ibid、47頁

国政府に送っている。ウエスレーの率いるメソジスト運動が、ただ単に英国の上流社会というものを対象とするだけでなく、いわゆる炭鉱労働者に代表される下層社会に飛込んでいき、福音を伝える運動へと発展することとなる。メソジスト運動はその当時から今日に至るまで、教会を取り巻く社会や世界を宣教の対象にしている。困窮者が教会の内外にいれば、その中に入って行き、援助や支援を実行することが伝統となり、メソジスト教会の宣教実践に定着することとなる。「世界はわが教区なり」を提唱したウエスレーの意図は、「教区」を前提としていたことに間違いはないが、個人の「魂の救い」から「社会や世界の罪、悪」からの救いを指向していた。メソジスト教会のグループから後に、社会の貧困に取り組む救世軍（ウィリアム・ブース大将）が生まれたのも、その一例と言える。

IV ウエスレーの聖餐論と宣教論

次にウエスレーの聖餐論の中にも、彼の宣教論の中心となる「恵みの神学」が見られることに着目し、ウエスレーの聖餐論に短く触れておきたい。ジョン・ウエスレーが生涯にわたって聖餐を強調したことは、よく知られている。ウエスレーは聖餐を「恵みの手段」と考えており、聖餐には「自己の救い」と「他者の救い」を結びつける架け橋としての役割があると考えていた⁷⁾。ウエスレーは信仰者が洗礼を受け、過去の罪から新しく生まれ変わり、新生した状態からさらに、聖餐を通して、神に与えられた恵みを確認し、「聖化」の道を歩むと主張している。その意味でウエスレーが「聖餐」を「聖化」と結びつけて、「恵みの手段」として自らも恒常的に「聖餐」にあづかることを大切にしていた。ウエスレー研究者の坂本誠は、ウエスレーの「聖餐」を宣教のわざとして考える場合に、二つの側面があるとしている。一つは回心を与える側面（Converting Grace）であり、もう一つは確信を与える側面（Confirming Grace）である⁸⁾。ウエスレーは、聖餐を名ばかりのキリスト

7) 坂本誠（2009）「ウエスレーの聖餐論」（教分館）141頁

8) 坂本誠 Ibid 142頁

者が真実のキリスト者になるための回心を与える儀式として考えていた。この意味において聖餐には宣教的な、回心を促す性質を持たせていたと言える。これはウエスレーが様々な集会において、多様な教派の人々に聖餐の場を開放していたこととも関係している。当時は幼児洗礼を受けた者がほとんどであったことを考えるならば、聖餐受領者の中に非キリスト者が存在したかどうかは微妙である。しかしウエスレーの聖餐は、名ばかりのキリスト者が、もう一度信仰の道に立ち戻り、救いの確信を持ち、真実のキリスト者に回心していく、恵みの手段であったことは間違いない。聖餐が回心をもたらす恵みの手段であることを考えるならば、ウエスレーが非キリスト者、未受洗者への聖餐を拒否することは、考えにくいと思われる。ウエスレーにとって聖餐の主体は聖霊であり、恵みの手段であるため、人間がそれをコントロールすることはできない。聖霊に導かれて、聖餐を希望する人が出てくれば、それを受け入れ、聖餐にあづかり、その後回心によって洗礼に導かれるという順番も考えられる。

坂本は、ウエスレーの回心を与える儀式としての聖餐を考察するにあたり参考になる事例として、「フェッターレイン・ソサエティ」との関係で聖餐に関連した一つの事件を紹介している。フェッターレイン・ソサエティとはウエスレーが「心が温まる経験」をしたモラヴィア派のロンドンの拠点のことである。モラヴィア派は、清い心を持つようになるまでは、誰も聖餐にあずかるべきではないと考えていた。これは「静寂主義」（救いの確信を得るまで、恵みの手段を使用せずに、神を静かに待つ）とされた教えによる。ウエスレーは1738年にモラヴィア派の拠点であるヘルンフートを中心に旅行で回り、モラヴィア派の牧会の様子をつぶさに見学する。1738年7月には、マリエンボルンに到着するが、そこである事件が起きる。それは、ウエスレーに同行したインガムという人物は聖餐にあずかることが許可されるのだが、ウエスレーはモラヴィア教会から「疑いを抱いているため平安がなく、休まなく揺れ動いている信仰者であって、聖餐を受ける資格がない者」として陪餐を拒否される⁹⁾。ウエスレーの回心を与える儀式としての聖餐ということ

からすれば、疑いによって揺れ動く信仰者こそ、また弱い信仰者に対してこそ、主の晩餐への招きがあると解釈される。ウエスレーは生涯、聖餐を最も重要な恵みの手段として捉えていたことは明かで、聖餐を拒否されたことは、あまりにも衝撃的な経験であったに違いない。ウエスレーはシュパンゲンベルグとの会話で聖餐などの恵みの手段の使用に関して以下のように語っている。「私は信仰の力について彼が言ったことすべてに同意する。「誰でも」信仰によって「神から生まれた者は罪を犯さない」ことに同意する。しかし、誰でも疑いや恐れを持っていることに責任がある限りは信仰を持ってないということには賛成できなかったし、信仰を持つまで主の晩餐や他の神の儀式をやめるべきであることにも賛成できなかった。」¹⁰⁾ ウエスレーの宣教論的な聖餐に対する基本的な考えの表明である。

V 米国合同メソジスト教会の歴史と現状

次に、ジョン・ウエスレーの宣教論を基に米国で教派的発展を遂げた、米国合同メソジスト教会の略史と現状について、概観しておきたい。英国ではジョンウエスレーの死から2年後にメソジスト教会が誕生するが、米国では1780年にデルウェア州のケント地区にバラット・チャペル (Barratt's Chapel) が創立され、このチャペルが米国における最古のメソジスト教会とされている。1768年と1774年にウエスレーは英国から、フランシス・アズベリー (Francis Asbury) を、1784年にはウエスレーの友人のトーマス・コーク (Thomas Coke) を米国に派遣し、1784年11月14日の日曜日に、この二人がバラット・チャペルで歴史的な出会いを遂げる。その後この二人の尽力により、1784年のクリスマスにメソジスト監督教会 (Methodist Episcopal Church) が、米国で初めてメリーランド州、バルティモアで組織されることになる¹¹⁾。アメリカでのメソジスト教会の宣教は、その初期の時代、西部

9) 坂本誠 Ibid 146頁

10) 山口徳夫訳 Ibid 130頁

11) Barratt's Chapel, https://en.wikipedia.org/wiki/Barratt's_Chapel

への開拓者と共に、西部へ進み、伝道したことが知られている。「開拓者が丸太小屋を建てる金槌の音が聞こえるところには、必ずメソジストの巡回伝道者（circuit riders）が乗った馬の足音がした」と言われたほどであった。巡回伝道者の多くは信徒であり、この馬にのった巡回伝道者（circuit riders）により、メソジスト教会は米国で燎原の火のごとく広がっていった。1844年にはメソジスト監督教会は米国で最大のプロテスタント教会に成長した。この間、1787年には、アフリカ系アメリカ人牧師として最初に按手（牧師の資格）を受けたアレン・ジョーンズ（Allen Jones）は教会の礼拝における人種差別に抗議して、アフリカ・メソジスト監督教会（African Methodist Episcopal Church=AME）を創設している。その後米国のメソジスト教会は数々の分裂と合同を繰り返すことになる。1830年には、メソジスト監督教会から分裂したメソジスト・プロテスタント教会（Methodist Protestant Church）が誕生する。また1844年には、メソジスト監督教会は教派における奴隷制度問題および監督（Bishop）の権限に関して総会が分裂し、メソジスト監督教会は北部監督教会と南部監督教会に別れることとなる。1939年に、北部と南部の総会が再度合同し、またメソジスト・プロテスタント教会がこの合同に合流し、メソジスト教会（The Methodist Church）が誕生する。そして、1968年には、このメソジスト教会（The Methodist Church）と福音合同同胞教会（The Evangelical United Brethren Church=EUB）が合同して、現在の合同メソジスト教会（The United Methodist Church）が誕生する¹²⁾。もともと福音合同同胞教会（The Evangelical United Brethren Church=EUB）は、ウエスレーの信仰を基にする宗派で、歴史的発展事情と神学的強調点に多少の相違点はあるにせよ、同じウエスレーの伝統の流れに属するものとして教会合同が可能となった。

第二次世界大戦前まで存在していた、日本のメソジスト教会の名称の由来を調べて行くと、当時の米国メソジスト教会の名称を基にしていることがわ

12) United Methodist Church Official Website: [umc.org](http://www.umc.org) (<http://www.umc.org>)

かる。明治や大正時代の文献をみると、漢字でメソジスト教会を「美似教会」または「美普教会」と表現している。「美似」とは（Methodist Episcopal Church）の頭文字、「M」と「E」から来ており、「美普」（ミフ）とは（Methodist Protesutant）の頭文字、「M」と「P」の発音から来ている。現在、合同メソジスト教会は、米国内に7,183,193人の信徒、教会数は34,892（2014年現在）となっている。なお、全世界には1,210万人の信徒、約4万3000の教会が合同メソジスト教会に所属している¹³⁾。

VI エキュメニカル運動における宣教論の変遷と米国合同メソジスト教会の宣教の実践

最後に、世界のエキュメニカル運動における宣教論の変遷を概観し、現在の米国合同メソジスト教会の宣教の実践との関係性について論じたい。

20世紀の中期に入り、世界の列強国による植民地支配が終焉し、独立国がアジア・アフリカで誕生することに伴い、これまでの宣教論は、「宣教論のパラダイム転換」とも呼べる時代的チャレンジに直面する。これまでの伝統的な宣教論が神学的に、宣教理解の新しい枠組みへの要請を受けることとなる。この変化の第一の要因は従来の欧米宣教から世界宣教への質的転換に求めることができる。世界のエキュメニカル運動の嚆矢と呼ばれる、1910年に、スコットランドのエジンバラで行われた世界宣教会議の終了と同時に「全世界への伝道」の招きの「使信」がそれぞれ「キリスト教国における教会員」宛と「非キリスト教国におけるキリスト教会員」宛に分けて発せられた。会議の成果として合意された、このキリスト教を伝道することにおける一致の招きは、エキュメニカル運動の嚆矢としては歴史的意味を有していたが、植民地主義的な欧米宣教が止揚される歴史の必然に直面せざるを得なかった。言い換えるならば、宣教の主体であるキリスト教国、欧米から、宣教の対象、客体である非キリスト教国、アジア、アフリカへの宣教というパラダイムに

13) United Methodist Church Official Website, Ibid,

終止符が打たれたことを意味していたのである。このことは、1910年に開催された世界宣教会議においては、1,200人の参加者の内、わずか17人を除いて欧米人であったのに対して、1961年にニューデリーで開催された世界教会協議会（World Council of Churches=WCC）第3回総会の出席者は147教会の代議員577人の内、実にアフリカからの参加者が半数を占めていることに如実に示されている¹⁴⁾。この宣教論の変化の第二の要因は1950年代にエキュメニカル運動において認知された、宣教活動を神学的に支える基礎としての「神の宣教」（ミッシオデイ=missio Dei）概念の登場であった。ミッシオデイとは神の三一論に基づく神の外側への働きを示す宣教論であることから、当時の教会及び伝道協会の宣教への取り組みにとって、まさに必要とされていた神学的基礎を提供したのであった。すなわち、創造者なる神は御子、イエス・キリストを世界におくり、神とその御子は人間の救いのために聖霊をおくられたとする三位一体論に基づく宣教理解であった。そして「神の派遣」への参与が教会、キリスト者のあり方と理解されたのであった。また、神は第一義的に世界に関与されたとする「神の宣教」は教会の宣教であると同時に、教会のみを通しての宣教ではないことを明らかにした。特に、教会側にとっては宣教活動の源泉が三位一体の神に依拠し、教会においてもまた伝道協会においても必要不可欠な働きであることが確認された。エミールブルナーが述べるように「火は燃えることによって存在するように、教会は宣教することによって生きる」ことが再確認されたのであった。「ミッシオデイ」、すなわち「神の宣教」は、この世界における宣教が神が主体となる宣教であり、それを通して、私たちは来るべき、またすでにある神の支配に参加することが確認された。

1910年のエジンバラで行われた世界宣教会議は、米国メソジスト教会の信徒であった、ジョン・アール・モットによって準備され、実施された、宣教学上でも分岐点となった会議であった。この会議の結果、キリスト教主義大

14) ANS J Van Der Bent(1991)「Dictionary of the Ecumenical Movement」(WCC Publication, Geneva) 1086頁

学や神学校において、宣教学が学問として認知されるようになった。2014年2月に来日した、米国の合同メソジスト教会の世界宣教部総幹事のトーマス・ケンパー博士は、関西学院大学神学部が主催した神学セミナーの講演で、ミッシオ・デイと米国の合同メソジスト教会との関係について以下の様に述べている。

「1986年に合同メソジスト教会から、「神の宣教におけるパートナーシップ」と題された世界宣教部の宣教神学に関する文書が出されました。この文書を通して、合同メソジスト教会にとっても、ミッシオデイの概念が明確な宣教の指針となっています。この概念は現在においても、教会が宣教師を世界に派遣するという文脈において、宣教とは何を意味するのかについて、普遍的とも言える広がりの中で共通に合意された理解となっています。宣教とは、私たちが誰であるから、何をするということではありません。私たちは、世界で神がなさることに参加する、イエスキリストの教会であるということです。私たちは、神が世界に受肉されたのと同様に、恵みによって宣教のただ中に、おかれているのです。」¹⁵⁾

2013年に韓国の釜山で世界教会協議会（WCC）の第10回総会が開催された。総会では「共にいのちに向けて—変化する世界情勢における宣教と伝道」と題した、宣教に関する新たなエキュメニカル文書が出されている。「宣教と伝道」に関する文書は、WCCから出されたものとしては、1982年以来、初めてのものであった。この文書が画期的なのは、WCCに加盟していないカトリック教会やペンテコステ派の教会が加わったチームによって起草され、議論されてきたことにとどまらず、宣教と伝道の中心主体であるキリスト教会が包括的な大文字の“C”で表現されていることである。大文字の“C”は公同の教会、普遍的な教会を意味し、それぞれの教会は教派、個教会とされていることで、世界的に存在する教会の宣教論が展開されている。つまり、メソジスト教会を含めたプロテスタントの教派、カトリック、正教会を含む、

15) 関西学院大学神学部編（2014）「宣教における連帯と対話」（キリスト新聞社）17頁

クリスチャンファミリー全体としての共通の取り組みとしての宣教論が表現されていることである。「共にいのちに向けて」というこの文書は、組織としての教会の働きにおいて、また、個人として神の宣教を担う信仰者の働きにおいて、聖霊の役割が非常に大切であることが強調されている。この強調点は、明らかに、正教会及びペンテコステ派教会で優先順位が高い「聖霊」に関する問題意識、関心事項を反映している。しかし同様に、メソジスト教会では聖霊の働きは神の「恵み」の働きと同義語であり、メソジストの宣教論に深く通底している鍵概念といえる。文書は最初に、私たちが神の宣教に関与していることを明解に述べている。それは、神が私たちの宣教を支えているのではなく、神の宣教（ミッシオデイ）に私たちが参加していることを明らかにしている。文書では、「聖霊」について4つの表現形式で考察されている。第1は、宣教の霊、それは、私たちにいのちの息吹とエネルギーを与える。第2は、解放の霊、それは、私たちをインクルーシブ（包括的）にし、多様なものにする。第3は、共同体の霊、それは、私たちを一つにし、突き動かす霊。第4は、ペンテコステの霊、それは、私たちを派遣し、イエス・キリストの福音の分かち合いを促す。この四つの霊の働きで、注目されたのが、「解放の霊」という項目の下に書かれている、「周縁からの宣教」という概念である。この概念は、前述の「宣教のパラダイム転換」の文脈をさらに進展させ、宣教の新しい方向性を示唆している。今日の世界のキリスト教人口は、過去に比べて、グローバル・サウス、いわゆる南の国々に集中している。キリスト教は人口動態からすると、すでに西欧の宗教ではなく、非西欧の宗教となっている。しかしながら、私たちは依然として、キリスト教の共同体の中心がヨーロッパ及び北米にあり、アフリカ、アジア、ラテンアメリカは宣教師が派遣された地域、また現在も派遣されている「周縁」地域と考えがちである。宣教論は権力のある、強い中心から、権力のない、無力な弱いものに施されるかのように考え、議論され、実践されてきた。現在、このような地形学的な宣教論は、あまり機能しなくなっている。これに代わって、この文書に示されているのは、宣教ということが、かつて地理的には周

縁と考えられていた地域、またある意味では現在も経済的な周縁である地域から、生み出されて来ると主張されている。WCCの文書は次のように、述べている。

「宣教は中心から発して周縁に向かってなされる運動、また、社会の特権をもつ人々から社会の片隅に置かれ、周縁化された人々へなされる運動と理解されてきました。しかし現在は、この周縁化された人々が宣教の鍵を握る主体であることを自ら主張し、宣教は形を変え、変容していることを認め、肯定的に捕らえようとしています。今後の宣教を展望していくときに、この役割の逆転は、強固な聖書の基盤を持っていることに気づかされます。なぜならば、神は貧しい民、愚かな者、そして弱く無力な者をお選びになり、正義と平和という神の宣教を推し進めたからです。そして、そのことによって私たちのいのちが輝くと第1コリント1章18節から31節に示されています。」¹⁶⁾

前述のケンパー博士は、米国メソジスト教会では、アメリカ人やヨーロッパ人のみが宣教師として、いわゆる「まだ福音の届いていない地域」に出かけていくという考え方を、かなり前に放棄しており、むしろ現在は、「全ての地域から全ての地域に」派遣される宣教師を提唱していると述べている。ケンパー博士は、米国メソジストの世界宣教部には、中国から派遣され、アメリカのオクラホマ州で働いている宣教師がいること、また、アフリカから派遣され東南アジアに駐在する宣教師、香港やフィリピン出身で日本で働く宣教師、南米のアルゼンチン出身でニュージャージー州で働く宣教師、ボリビア出身で中央アメリカのホンジュラスで働く宣教師などを列挙している。またアメリカ以外で働く、国際的な宣教師の半数以上が米国以外の国々の出身者であること、宣教師インターンとして、2年間の活動期間で働く若者を、「グローバル・ミッション・フェロー」と呼び、世界中から募集していることを紹介している¹⁷⁾。

16) 世界教会協議会（WCC）の第10回総会提出文書（2013）「共にいのちに向けてー変化する世界情勢における宣教と伝道」（文書セクション6の部分的引用）

「周縁からの宣教」という概念は、合同メソジスト教会がこれまで実践をしてきた宣教の取り組みと共通点が多くあり、宣教論の焦点に合致していることが解る。すなわち、現在の米国合同メソジスト教会の世界宣教論には、ウエスレーの神学的特色を強く反映した「神の宣教」論（ミッシオデイ）がその中軸にあること、世界のエキュメニカル運動の変遷の中、宣教の実践が「貧しい者と共にある働き」と深く通底し、連携していることが解る。世界の貧富の格差が拡大する現在、貧しい者が、いかなる社会においても経済的に周縁に追いやられている存在であることへの取り組みは、米国合同メソジスト教会が、「周縁からの宣教」を教会の希望と変革の源泉としていることを意味しているであろう。

（筆者は関西学院大学商学部教授）

17) 関西学院大学神学部編、Ibid 26頁